

る場合に始めて要害となつて現はれるものであることは、此の地方の歴史を究むるものゝ特に注意すべきことゝ思ふ。更にまた此の地方に於て、等しく海拔何千尺を地圖の上に彩る山にしても其の山の性質如何によつては、要害たり、境界たり得る點に於て、殆んど無意義のものも存することであつて、少くとも興安嶺やウラル山脈を、鐵路の横切つて居る地方で見れば、適切に此の事情を感知することが出来る。要するに漠北の地方から天山の北方、準噶爾伊犁の地方を中に、シル河に及ぶ廣漠の地域は、古來屢々一個の勢力の下に統べられたもので、今日更にその北方に横はる西比利亞一帶の地が、一個露西亞の勢力に統べらるゝ如き有様も、その一例と見ることが出来るやう。

謂ふ所のソグディアナとは、シル・アム兩河の間の地方を指すと見て差支ないが、其の間史上に最も重要で、また最も有名なるものは、サマルカンドを中心にした地方、今のサマルカンド州地方である。後漢書西域傳晋書四夷傳に粟弋、魏書西域傳に粟特國といふものは、之に相當する名と思はれる。然もまた南北朝時代から支那の史書、即ち北史魏書等に康國として記さるゝものが、またこの地方を指すものなることも定説である。たゞ何が故に之を康國といふかに就いては議論必しも一致しないが、今は此の問題に入ることを避ける。

ソグディアナ地方の人がその特有の技能なる商利を逐ふて遠く葱嶺を越し、東の方支那と通商したことは、餘程古くからのことであつたと思はれる。スタイン (Stein) 氏が羅布泊^{ロブ泊}より敦煌に通ずる古道の廢墟から、西紀一世紀に認められたと思はれるソグディアナ語の商業上の文書を獲た如きは其の一證で、かゝる文書を書き残したソグディアナ人の東來の目的が、支那に在つたことは推測するに難くない。漢代の史書に西域の胡客とか、賈客とか、商胡とかいふ文字が散見するが、此等の文字によつて呼ばれた人々の中には、此の國の商賈が必ず少からず含まれ